# 共創ネットワーク

# 学林舎情報

●発行日:2020年9月19日(土)

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

### 



## CAKURINGHA OPICHA

### 教育の行き先 次年度以降への 授業繰り越し

2019 年 12 月に中国で新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の発生が報告されて以来、世界各地で感染 者が確認され、2020年1月31日には世界保健機関 (WHO) が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」 に該当すると発表しました。日本では、2020年2月27 日、政府が全国の小学校・中学校・高校に臨時休校を 要請し、4月16日には、全都道府県に対し、緊急事態宣 言を発令しました。国民の多くが不要不急の外出を控 え、子どもたちは家庭での学習を余儀なくされました。 その後、緊急事態宣言が解除され、徐々に学校は再開さ れましたが、感染拡大防止のため、短縮授業や分散登校 などの措置が各学校でとられてきました。これらの措 置により多くの学校で授業時間が不足しているとの報 告があがっています。コロナ禍で発生した子どもたち の学習の遅れに対して、文部科学省はどのような対応 を行っているのでしょうか。

文部科学省は、授業の遅れをとり戻すためにさまざまな取り組みを行ってもなお、本年度指導を計画している内容について、学年内に指導を終えることが困難な場合の特例的な対応として、次年度以降への授業の繰り越しを認めると発表しました。但し、最終学年(中学校では3年生、小学校では6年生)においては、繰り越すことが難しいため、最優先で授業時間を確保し、年度内に学習を終えるよう求めています。最終学年に次ぐ学年(中学校では2年生、小学校では5年生)は令和3年度を含めた2年間、それ以外の学年は令和3年度・令和4年度を含めた3年間を見通した授業の繰り越し

を認めることが発表されています。

次年度繰り越しには、「さまざまな取り組みを行って もなお、」という条件がついています。さまざまな取り 組みには、次のような内容があげられています。

①時間割編成の工夫: 1コマの授業時間を 40 分や 45 分に短縮することで 1 日当たりの授業コマ数を増やす などの工夫をする。

②夏休みや冬休みなどの長期休みの期間を短縮して授業を実施する。

③土曜日の午前中に授業を実施する。

④学校行事の重点化をはかる:運動会や文化祭、修学 旅行などの行事において、準備時間の短縮や規模の縮 小をはかる。

⑤学習の重点化をはかる:学校の授業でどの内容を優先的に学習するかをはかり、学校以外でできる学習は、ICT などを活用して家庭で行うなどの工夫をする。

例えば、中学校の数学の授業では、連立方程式の解き 方の授業は学校で行い、練習問題を解く演習は家庭で 行う。また、国語であれば、物語の感想を述べあう学習 は授業内で行うが、感想をノートに書いたり、漢字の練 習をしたりする学習は、家庭などの学校外で行うなど。 以上のような取り組みを行ったうえでなお、年度内に 決められた学習内容が終了しなければ、特例的に次年 度への繰り越しを認めるということです。しかし、①~ ⑤の取り組みを行うと、授業は駆け足で行わざるを得 ません。従来の授業であれば、学習の習得に支障がな かった子どもでも、スピードをあげた授業にはついて いけない子どもも出てくることでしょう。また、演習時 間を家庭学習に移行することは、家庭間の意識の差が、 そのまま子どもの学力の差につながっていきかねませ

# 共創ネットワーク 学林舎情

ん。ICT の活用が唱えられていますが、ICT の環境も家 庭によって大きな差があるため、子どもの学力の差に つながっていくことが懸念されます。文部科学省が、次 年度以降への授業の繰り越しを認めていることを充分 に認識し、子どもたちの学習が駆け足で行われたり、置 き去りにされる子どもが出たりすることのないよう に、保護者や地域でも見守っていく必要があります。

しかし、次年度、次々年度と繰り越していった学習は どれくらいで吸収できるのか、どのような影響をおよ ぼすのかわかっていません。

コロナ禍という未曽有の壁の前で、文部科学省も自 治体も学校も家庭も試行錯誤の状況が続いています が、子どもたちの学習の歩みを止めないよう、子どもた ちの学習を保障できるよう努めていくことが肝要です。 (文/学林舎編集部)

### 学習の行き先 中学教科書改訂に関して 一理科編

中学校では、2021年度から全面実施される新学習指導要領にあわせて、改訂された教科書が使われることになり ます。新学習指導要領では、主体的に学ぶ姿勢を重視しているため、改訂された教科書でも、生徒に深く考えさせた り、生徒どうしで議論させたりするように、さまざまな工夫がされています。今回は理科に特化して、新しく学習す る内容や理科の改訂のポイントなどを紹介します。

### 【学習する内容の変化】

新学習指導要領の実施にともない、履修学年や学習する内容が変わるものは、下の表のようになります。

中学1年	・「2力のつり合い」が、中学3年から移動 ・「光の色」が、新たに追加 ・「圧力」が、中学2年へ移動 ・「水圧」、「浮力」が、中学3年へ移動 ・「プラスチック」が、中学3年へ移動 ・「生物の特徴と分類の仕方」が、新たに追加 ・「動物の体の共通点と相違点」が、中学2年から移動 ・「葉・茎・根のつくりとはたらき」が、中学2年へ移動 ・「自然の恵みと火山災害・地震災害」が、中学3年から移動
中学2年	・「電気による発熱」が、小学6年から移動 ・「放射線」が、新たに追加 ・「葉・茎・根のつくりとはたらき」が、中学1年から移動 ・「動物の体の共通点と相違点」が、中学1年へ移動 ・「生物の種類の多様性と進化」が、中学3年へ移動 ・「圧力」が、中学1年から移動 ・「自然の恵みと気象災害」が、中学3年から移動
中学3年	・「水圧」、「浮力」が、中学1年から移動 ・「2力のつり合い」が、中学1年へ移動 ・「プラスチック」が、中学1年から移動 ・「生物の種類の多様性と進化」が、中学2年から移動 ・「自然の恵みと火山災害・地震災害」が、中学1年へ移動 ・「自然の恵みと気象災害」が、中学2年へ移動

# ● 共創ネットワーク 学林舎情幸



#### 【理科の改訂のポイント】

新学習指導要領に基づく今回の教科書では、大きく 分けて2つのポイントについて改訂が行われました。 1つ目は、自然の事物・現象に進んで関わり、見通しを もって観察・実験を行ったうえで、結果を分析・解釈 するといった探求学習の充実です。

2つ目は、理科の有用性や理科を学ぶことの意義を 実感し、日常生活や社会との関連を重視することです。 科学的に探求するために必要な資質・能力を、3年間 を通じて計画的に身につけるため、新学習指導要領で は、各学年で重視する探求の過程を定めています。

中学1年では、「自然の事物・現象に進んで関わり、 その中から問題を見いだす。」とされています。例えば、 光を鏡で反射させ、入射角と反射角の関係性を見いだ すとともに、鏡にうつる像を光の反射と関連づけて理 解させます。

中学2年では、「解決する方法を立案し、その結果を 分析して解釈する。」とされています。例えば、簡単な直 列回路や並列回路をつくり、回路に流れる電流や、抵抗 や豆電球に加わる電圧を測定することで、電流計や電 圧計の操作方法を身につけます。また、豆電球に流れ込 む電流と流れ出る電流の大きさの関係を予測し、それ を調べる実験を計画・実行し、その結果から予測が正 しかったかどうかを検証します。そして、実験を通して 見いだした規則性を発表し、表現する力を養います。

中学3年では、「探求の過程を振り返る。」とされてい ます。例えば、メンデルの交配実験の結果の分析から、 子や孫の形質の現れ方の規則性を見いだし、その規則 性は、対になっている遺伝子が分かれて別々の生殖細 胞に入ることによってもたらされるということを、コ インやカードを用いた交配のモデル実験によって確認 します。その際、モデル実験の試行回数と得られる結果 の関係性に気づいたり、モデル実験の操作や結果が何 を意味しているのか考えたりすることで、探求の過程 を振り返ります。

今回の理科の教科書の改訂によって、科学技術が日 常生活や社会を豊かにしていることや、安全性の向上 に役立っている事例がこれまでより多く扱われていま す。また、実験や観察などを通じた主体的・対話的で深 い学びを実現するためや、理科の見方や考え方をはた らかせ、科学的に探求する力を育てるために、さまざま な工夫がされています。

(文/学林舎編集部)

### 教育の行き先 出生数の減少による、 教育への影響

### ○ベビーブームから初の90万人割れ

第二次世界大戦の終結後、日本では二度のベビー ブームが訪れました。その出生数は、第一次ベビー ブームでは約270万人、第二次ベビーブームでは約210 万人です。

第二次ベビーブーム後は出生数が次第に減少し始 め、1975年から200万人を割りこみ、2019年には約86万 4,000人まで減少しました。この年、初の90万人割れと いう結果となりました。ここまで出生数が減少した原 因はさまざまありますが、今回はこの出生数の減少に よる教育への影響を解説します。

#### ○教育への影響 [家庭の場合]

そもそも教育とは、人間形成のための訓練を施すこ とで、その訓練の場は家庭や学校など多岐に渡りま す。その中でも、家庭における教育はすべての教育の 出発点ともいえ、子どもたちは家族とふれあい、社会 の基本的なルールを学び、ときには痛い思いをして自 分の限界を知ることで、人格を形成していきます。家 庭での教育は最も重要な教育の場といえるでしょう。 そのような家庭での教育が、少子化によりどのような 影響を受けるのでしょうか。

最も深刻なものは、子どもに対する親の過保護・過 干渉を招きやすくなることです。一人っ子の家庭が増 え、その分、子どもの塾や習い事などにお金を回せる ようになりました。これは良い点ともいえるでしょう が、裏を返せばお金をかけられるようになった分、幼 児期から習い事を詰め込んだり、塾に通わせ受験させ たりすることで、子どもの生活にゆとりを持たせない 親が増える恐れがあります。

また現在、子どものすべての行動を親が監視する、いわゆる「ヘリコプターペアレント」が社会問題となっています。これは、自分の子どもが失敗しないように、まさにヘリコプターが子どもの頭上でホバリングをしているように子どもを見守り続け、いざ子どもが困難に遭うものならばすぐさま救いの手を差し伸べるといったものです。これは一見愛情とも見て取れますが、これにより子どもは自己肯定感や自己決定力を身につける機会を失い、問題行動を起こすリスクが高まる可能性も否定できません。子どもを大切にする気持ちは親の誰しもが持っているものだと思いますが、行き過ぎると子どものためになりません。親と子であれ、その間は一定の距離を空けておくことが大切です。

#### ○教育への影響 [学校の場合]

もう1つ重要な教育の場として学校があげられます。学校に通う目的は、学力を身につけることはもちろんですが、学校という1つの社会集団に加わり、規則を守ったり周りと協力し合ったりすることで社会性を身につけることです。少子化でその集団の人数が減少することにより、お互いに切磋琢磨し合う機会や、良い意味での競争心が希薄になることが懸念されます。また、違う学年の子どもたちとの交流が減り、異年齢集団の中での友情や葛藤、忍耐などを経験する機会が失われる可能性も考えられます。

しかし、少子化により教師1人当たりの児童・生徒 数が減少したことで、1人ひとりにきめ細やかな教育 を行う環境を整備しやすくなったともいえます。小学 校でのプログラミングや英語教育の導入が実現できたの も、少子化がその一助となっているといえるでしょう。

今後、出生数が劇的に回復する見込みが薄い中、私 たちはこの現状と向き合い、どう教育に生かすかを考 える必要があります。

(文/学林舎編集部)

# ● 共創ネットワーク学林舎情報21



# ● イギリス・タイムズ誌の 世界大学ランキング2021

今月イギリス・タイムズ誌が今年の世界大学ランキングを発表しました。多少の順位の変動があっても、ベスト10の顔触れはほぼ毎年同じで、1位のイギリスのオックスフォード大学は5年連続で首位をキープしました。今年のランキングで特に注目すべきは、アジアで初めてトップ20位に入った中国の精華大学です。以前は東京大学やシンガポール国立大学がチャレンジしては跳ね返されてきた高い壁(トップ20)でしたが、ようやくアジアの大学がその壁を突破しました。東京大学は2014年、2015年と2年連続で23位まで上がりましたが、2016年に43位に下がって以降、中々順位が上がらない状態でした。現在東京大学は36位と、一時期40位台に低迷したころから回復気味ですが、この数年停滞している間に他のアジアの大学が躍進し、TOP20位初のアジアの大学は中国の精華大学となりました。

2013年に安倍首相が、"今後10年で世界大学ランキングトップ100に10校ランクインさせる"と宣言して以降、安倍首相の思いとは裏腹に東京大学をはじめ日本の大学は、世界大学ランキングで順位を下げ続けてきました。"このようなランキングは英語圏の大学が有利だから"、"欧米に偏ったこのようなランキングは意味がない、"と批判をする方もおられますが、日本では大学の価値を受験生の偏差値の指数で評価する、受験の難易度でイメージするしか思い浮かばないのかもしれません。しかし、日本以外のアジアの大学は総合的な大学力を高め、順調に順位を上げています。日本だから仕方がない、という逃げの言い訳は通じません。

大学の価値は単に受験時の学力という教育力だけで

なく、教員・研究者の研究論文の引用や研究実績といった研究機関としての役割、そして大学の国際化としての指数、さらに大学運営で必要な軍資金の調達など 多岐にわたって評価されます。

大学生の学力に目を転じると、TOP10の常連大学、例えば今年2位になったスタンフォード大学や3位のハーバード大学などでは、大学生が単位を取るために電話帳のような分厚い専門書を年間400~500冊も読破する必要がある、といわれています。一方日本の大学生は"一日に本を読む時間が0時間"が5割程度いるといわれています。本を読まないでも単位が取れる日本の大学と、大学生が多くの書物・文献と向き合い格闘しているアメリカの大学とでは、大学の教育力・大学生の学力という質と差が歴然としているのです。

大学生の卒業後の価値に目を向けると、アメリカの大学生はコロナ禍でもインターンシップで卒業後のキャリア固めをしています。アマゾンや Facebook などで高額な月収(月7,000~8,000ドル)でインターンシップを経験しています。大学卒業後初年度年俸10万ドルも当たり前の世界で、キャリアを積んでいく準備のインターンシップでも、日本では破格といえる額です。

アメリカでは日本のような新卒一括採用はありません。野球を知らない素人をドラフトで指名し、給料を支払い一から野球を教えるプロ野球チームがないように、アメリカの企業は新しい人材を必要とする部門が、その時即戦力で仕事ができるものを雇用するのです。大学新卒でも入社したらその日から、バッターボックス(それぞれの職場)に入って結果が求められます。単なる職能力だけでなく総合的な人間力を育んで、大学生を鍛え上げて社会に送り出す大学はまだ日本に見当たりません。

少子化で受験生確保で苦戦し大学運営が厳しい中、 世界的にはまだまだ人口は増え続けます。国内事情だけで大学運営を考えると、この先、先細りしていくしかありません。グローバルな視点で物事を見て、国際競争力・大学力を高めていかないと、日本の大学はどんどんその価値を失っていきます。総合的な人間力が求められる大学生、同様に大学も総合的な大学力を育む必要があります。

(つづく)